

〈FD 資料〉

新任教員の春学期

—— 4 か月間の授業と学生についての私的記録 ——
(下)

川 畑 隆

3. 授業評価されるだけの回数を積んだ

6.01. 木／発達臨床心理学：この日は学生による教員の授業評価アンケートをとることになっていた。記入の仕方を説明しながら、なんか照れくさいような、ちょっと不安な感じだった。アンケート用紙の裏面には自由記述欄があり、そこにも書くようにと説明したのだが、回収してみるとほんの数名しか書いていない。あとでざっと回答用紙をみると、まあ評価はいい方だったと思うのだが、私が板書をしないから眠くなるというのが自由記述のあったうちの2枚に書かれた評価だった。たしかに今日はいつもとちがって寝ている学生が目についた。児童虐待防止の制度や業務の実際について話したので、いつもの事例を含めた具体的な話ではなかった。その影響もあったかとは思う。授業の最後で、責めたり皮肉ったりじゃなく事実として言ったつもりなのだが、「今日はよく寝ている人が多かった」と私の発言への反応も幾分あったかもしれない、あとから「寝ていてすみません」と謝った子がいた。いやいや、あなたのことを言ったんじゃない、ただそうだったと言っただけだから……と私は自分の発言の思った以上の影響に少し戸惑った。とはいっても、もらったのは今日の授業に対してだけの評価ではない。授業にビジュアルが必要だとは思っていて、登録履修者数が確定してからはレジュメを用意しているのだが、板書するような内容もあまりないのでほとんどしてこなかった。さっそく次週からよ

りビジュアルを意識するか。

同日 / Fさんが来室：Fさんがインターン・シップ参加に必要なゼミ担当教員による推薦書の用紙を持ってきた。次の授業が終わってからとりにくるということだった。Fさんとは一言二言交わすぐらいなので、まだそんなには知らないのだが、次のように書いた。でも、とってつけたように書いたのではなく、知っている範囲で本当にそう思っていることを書いた。

「Fさんはこれまでゼミは全出席で、熱心に参加してくれています。キャリア・アップ指導時から進路希望がクリアに見えてきたと語ってくれ、その希望に向けて現在の環境のなかで身につけられるものを身につけようという意思と意欲が見てとれます。インターン・シップの志望理由を読んでも決して上ずっておらず、地道に力をつけていこうという“静かな勢い”のようなものを感じます。インターン・シップ体験はFさんをさらに一歩前進させてくれると期待しています。どうぞよろしくお願いします」。私の目にはFさんはそんな学生だ。

同日 / 学校臨床心理学：この授業でも授業評価のアンケートをとった。ざっとみると、まあこんなものかなと思えるぐらいの評価だったのだが、とても良くない評価の書かれたものが2、3枚あって、ちょっと気持ちがしんどくなった。自由記述の部分も忘れずに書いてくれるように伝えたのだが、やはり面倒くさいのか書きにくいのか、10名前後が書いてくれただけだ。やはり板書をせよと書かれている。ビジュアルをもっともってこよう。少し年配の女性の聴講生がおられることをいつも目の隅にとめていた。ちょうどタイミングがあったのでご挨拶すると、「私がいることが邪魔になっていませんか？」と優しく尋ねてくださる。意味はいろいろあっただろうが、「いえいえ何をおっしゃいますやら、聞いてくださってありがとうございます」と答えた。ちなみにその聴講生の方のアンケート用紙には、「事例を話してくださるのでわかりやすい。里親の話を知りたい」と書いてあった。里親の話をするぞ。

同日 / Cくん来室：まえに研究室にきたことのある2回生のCくんがや

ってきた。身体がしんどくて困っているとのこと。心身の病気なら受診しなければならないことをふまえながら、彼のいろんな思いに関してああでもないこうでもない、また前と同じように、でも今度は前より少し短く1時間30分ほど話し込んだ。面白かった。“自分”を構成するものや“負ける”ということ、“恋”や“神様”のことも含めて、カウンセリングではなく、でも気持ちのうえでの細かいことについて喋り合うことは嫌じゃない。また報告にくるそうだ。

様々な事情

獲得単位が不足している学生と面談しその記録を提出しなければならない。私が面談したのは4名で、そのほかに1名とは電話で話した。

βくんは、ご両親が進める進路に逆らい本学に入学した。「心理をやりたい」と言って入ったのに、大学院に行けないようなことにでもなったら大変だと、笑いながら不安を覗かせていた。2年間ほどひきこもっているような状態で、これじゃあ駄目だと今年から頑張りはじめたという。自立というテーマとの戦いがβくんのなかで色濃く横たわってきたのだと、強く思った。

γさんは、はじめて親と離れての一人暮らし、友だちも誰もいない状況のなかで、とくに去年の春学期は昼夜逆転とひきこもりで大学へ来れなかったと言う。でもいまは友だちもできたし、昼夜逆転も努力して治りかけのようだ。たしかに授業ではよく顔を見かけるし、友だち同士でけっこうにぎやかに過ごしている。よかったねと思った。

δくんは、去年1年間は事情があってバイト漬けだったという。教務担当教員も私も「これだけしか単位がとれていない」と思っていたのだが、δくんに言わせると、「あんな状況でよくこれだけでも単位が取れた」ということになる。今年からはそのバイトもなくきちんと授業を受けているらしく、たしかにその様子は私も見ている。

εくんは面白くて憎めない学生だ。大学は好きで休むことなく友だ

ちといつも一緒にいるのだが、食堂の昼の定食の値段が下がる時刻まで待っていて授業に出られなくなるとか、試験日を間違えたとか、先生が予定と異なるときにレポートを課したとか、面白いエピソードをいろいろと教えてくれた。実は、この日の面談の日程調整をしたときに、彼は「もし自分が面談時刻を忘れてたらいけないので、その時は先生から電話してほしい」という意味で、私に自分の電話番号を教えた。もちろん私は指導すべき点をいろいろと思ったのだが、そのときは言わずに電話番号を聞いておくだけになってしまった。εくんがあまりにいい子なもんで、「昨日、面接を忘れる可能性があるからって僕に自分の電話番号を教えたよね。これがもし就職面接だったら、あの時点で君は失格だよ」と忠告する機会を逸してしまったのだ。

ζさんに電話をした。私が自己紹介すると愛想よく対応してくれた。でも、家庭の事情で学費の問題が出てきて、今後どうしようか考えているとのことだった。元気だということがわかったのはよかったのだが、大変だねと伝えた。なにか相談にのれることがあれば……と問うと、奨学金はもらっているからと答える。自分が言ったことにはそうとられるニュアンスが含まれていたんだとあらためて気づいたのだが、研究室の電話番号を教えておいた。電話の向こうでちゃんとメモをとってくれた。

6.02. 金／大学院臨床心理基礎実習・精神病院見学：私の車に大学院1回生5名を乗せて、c精神病院に見学に行ってきた。院長先生のお話のあと、女性の精神保健福祉士と若い男性の臨床心理士が、デイケア室、急性期患者病棟、開放病棟、閉鎖病棟、診察室、面接室などを丁寧に案内してくださった。それからお2人からのお話をお聞きして、とても充実した2時間だった。院生たちにとっては丁寧に扱ってくださって嬉しかっただろうし、本当にいい勉強になったろう。またバリバリやっておられる女性をみて、とくに女性の院生は思うことが多かったと思う。事前に病院訪問、見学に

ついてリハーサルをしておいたが、本番での院生たちの言動は、「君たち、95点だったよ」と言ってあげたいくらい好感のもてるものだった。でも私は口元までその言葉が出かかって結局やめた。言わないでおくのもいいと思った。ここの病院で継続研修ができればいいという下心があって、でもいきなりその話はあまりにも……と思っていたが、向こうからそれに関連した話を出してくださったので助かった。臨床心理士に付いて実習というのはなかなかむずかしいとのことだった。でもまた今後、あらためてお願いしてみることにした。院生たちは今日の見学を通して、こんなところで実習できたらいいなと思ったようだ。

6.05. 月／演習Ⅲ A・発達臨床実習：続けて欠席している学生がいると、ゼミの重要な要素としての仲間同士のつながりが作れるような働きかけが私に足りないんじゃないかと気になる。今日は計画どおりに発達臨床心理学の一環として高齢者のことをと、山田太一作、笠智衆主演のNHKドラマ「ながらえ」のビデオを観てもらった。最後の方で笠おじいさんが入院中のベッドのなかのおばあさんに、「おまえと一緒にいたい」と不器用に言う名場面があるのだが、そっとさりげなく学生たちを見ると、何人かが鼻をすすり目頭を押さえていて、よし！と何か安心した。

6.06. 火／教務課を訪問：春学期の試験を実施するかどうか、どんな形にするかなどを届けに教務課に行った。私が担当している演習実習以外の講義は発達臨床心理学と学校臨床心理学だけで、その2科目についてレポートなしの定期試験を行なうことにした。私は授業で、事例や日常のエピソードを通して具体的なことやその背後にある思いなどを伝えているつもりで、学生たちにそのことがどう伝わり、学生たちは何を思っているかを聞いたなと思っている。だから私が話したことの細かい記憶を問うのではなく、私の授業を通して思っていることや、それらを参考にしながら自分の目の前にある課題をどう解決しようとするかについて答えてほしいのだ。そう考えると2科目とも同じ試験問題でいい。でも両方の授業を受講している学生が若干名いるので、そうもいかない。

6.08. 木／発達臨床心理学：先日の授業評価アンケートの正式結果はまだ貰っていないが、中身は覗いたので、その影響を受けてパワーポイントを用意した。実はそのパワーポイント、そのうち使えるようになりたいとは以前から思っていたのだが、そういうことがあまり得意ではない私にとってはそんなに簡単でもないだろうから、夏休みにでもじっくり身につけようと考えていた。でもちょっと触ってみようと思って触り始めたら、なんと簡単簡単。画面が次々にできあがってスライドショー。こんなことならもっと早くからやっとけばよかった……。それでそのパワーポイント原稿の入ったパソコンを小脇に抱え、準備のためにいつもより10分早く教室へ赴いた。ところが、映らない。学生からも協力を得てあちらこちらの接続を確認するのだが、スクリーンに映らない(あとから、事務の女性に「映らなかったんですよ」と話したら、「先生、パソコンの外部ディスプレイ出力のキー押ししました?」と尋ねられて、「そ、それだ!」という、まあそんなことだった)。タイムリミットで私だけがパソコンの画面を見ながら話すハメになった。ああ、なんと今回もビジュアルなしだ。ところがそういう事情も察してくれたのか、みんなよく眠らずに聴いてくれている。もしかして、たった2枚のアンケート回答用紙にあったビジュアルなし批判に影響を受けた私が、ビジュアルがないとダメという投影(自分が思っていることを相手が思っていることだというふうに、自分の心を相手に映し出すこと)を受講生みんなにしていたのかもしれない。授業が終わるとHさんとIさんが私のところへやってくる、児童福祉施設に見学に行ってみたくてと言う。大学の比較的近くにある児童養護施設に見学を打診してみることにした。そこは私がよく知っている施設なのだが、学生だけで行かせるわけにもいかないかと、あとから思った。

同日 / HさんとIさん、そしてJさんも来室：Hさんたちが、児童養護施設(注)よりも情緒障害児短期治療施設(注)に行ってみたくてということを伝えにやってきた。結局、私が情緒障害児短期治療施設のd学園に行く用事があるので、そのときに一緒に行こうということになった。

(注) 児童養護施設：児童福祉施設の一つで、家庭で生活することが困難になった概ね2，3歳ぐらいから18歳になるまでの子どもたちが生活するところ。

情緒障害児短期治療施設：同じく児童福祉施設の一つで、情緒障害で治療を要する子どもたちが短期に入所し、治療、教育を受ける生活施設。情緒障害とは情緒の発達が遅れたり混乱している子どもの総称だが、学術用語ではない。

同日 / 学校臨床心理学：映らなかった原因がわかったあとのパワーポイント、めでたく映った。機械の操作の理屈が通っていなければ映らない、通れば映るというのはわかりやすい世界だ。パワーポイントを使うことには教員になる前から迷いがあった。学生の目を焦点づける対象が教員ではなくスクリーンになれば、教員と学生の人間関係が横に置かれるような気がする。ところが、教員になってから実感として思ったのは、とくに大教室では教壇近くの一部の学生を除いては人間関係は基本的にはとれないということだ。その人間関係とは、ここでは学生が教員との関係に縛られて、相手の教員がいないかのごとくには動けないというようなことをさす。でも教壇のすぐ前で机に突っ伏して寝られたときには、この仮説も打ち砕かれた。そんなことでパワーポイントを使うことを妨げる動機は減ってきていて、そしてこんなに簡単なら使おうということになった。でも、パワーポイントの全画面を印刷したものを配布するのはやめた。学生へのサービスが過ぎて、主体性とは反対のものを育てるような気がしたのだ。画面を見ながら学生はよくノートをとっている。出席票の1枚に、画面の切替えが早すぎるという苦情が書いてあったぐらいだ。書いてあることを一所懸命にノートに写している姿を見ると、そんなに書かなくてもいいのと思って実際にそう言うてしまうが、まったく書かないのよりは主体性を発揮しているのかもしれない。

同日 / 心理学基礎実験B：今日は授業の方はペアの先生がメインにやってくれているので、私は後部座席でこれまでの私担当分の基礎実験のレポートのチェック、採点をやっていた。レポートの細かいところの内容のチェ

ックよりは、こういうふうにはレポートした彼や彼女へのフィードバックをどのようにするかについて、エネルギーを使う。ある課題のレポートには、結局みんなに対して「了解」としか書けなかったし、そうとだけ書こうと決めたのだが、私がしなければならないのはカウンセリングじゃなくてレポートへのフィードバックだと考えると、もっと工夫が要るのだろう。

6.12. 月／大学院臨床心理査定演習：c 精神病院の見学実習レポートの提出はこの日が締切りで、全員きっちりと書いてきてくれた。c 精神病院にこのレポートのコピーに礼状を添えて発送する。私の知り合いから、新版 K 式発達検査2001を用いて知的障害児の発達診断を行なうアルバイトをやってくれる人を探していると聞いた。うちの大学院生にぜひやってほしくて、やってみたい人がいたら検査の特訓を行なうがどうかと希望者を募ってみると、たくさんの手が挙がった。やはり手が挙がらないよりは嬉しい。自分が言い出したことながら特訓とは暑い中たいへんだな、子どもを相手に実際に検査をやることも必要だが、その機会をどんなふうにして作ろうか……いろいろと考えたが、ともかく特訓をやる方向で進めることにした。

同日 / 演習Ⅲ A・発達臨床実習：教室に入っていくと、いつもより賑やかで動きがある。女子学生3名ほどが中心になって、ゼミコンパ(ゼミ単位で行なう懇親会)についてのアンケート用紙を配り、みんなに書いてもらっているところだった。動きを自分たちでつけようとしていることが、とても嬉しく感じられた。私も記入して渡した。演習の目的には、来年4回生になってから書かなければならない卒業論文の準備も含まれていることもあって、英文を読む練習もしておかなければならない。そこへ、ある学生が「英語を読む時間もとってほしい」と要望をくれたものだから、さっそく用意した。4回生のAさんとBさんがくれた某大学大学院の入試問題で、虐待やDVに関するものだ。2週間前に配布してあったので、今日が読む日だ。順番に読みと訳を回していったが、あまり出来が芳しくない。結局、私からの解説が主になっていく。私からの解説と云って、私も英語に

慣れているわけではない。こんなふうにしかな意味をとれないよね、ここの文法が不明だななどと言いながら辿っていった。英語を終え、来週から扱う「現代の子ども像」に関する新聞記事を配布し目を通してもらい、授業を終了した。すると、Kくんが私のところへ来て手にした紙を見せてくれた。そこには、先ほどの英文の全訳文がきれいに印字されていた。ちゃんと予習してきていたのだ。「言ってくれればよかったのに！」私は思わず小さく叫んだ。照れ気味に「そう言える雰囲気じゃなかったから……」とKくん。私にはみんなが英語があまり得手じゃなさそうに見えた。それで訳すように突きつけて英語が嫌いになることのないようにという考えもあって、私主導で進めた。でも、ここにも私の投影があったかもしれない。あまりいろいろと思わずに、「やってきた人は？」とか「ここわかる人は？」と問えばよかったのかもしれない。Kくんに悪いことをした。このまえ少年犯罪の話をしたときに、翌週インターネットで調べたデータを持ってきてくれたのもKくんだった。Kくんだけじゃないが、学生のやる気に応えなければならない。

6.14. 水 / e 市教育委員会の指導主事に面会：大学院2回生のLさんの修士論文の関係で、e市教育委員会の指導主事の先生にLさんと2人で会いに行った。不登校児にアンケートをとれないかというお願いだ。好意的に検討してくださるようだが、返事を待つことにする。

6.15. 木 / 学校臨床心理学：前々回と前回は不登校、今回は非行について話した。授業が終わり、出席票を提出にきた男子学生と目が合った。「僕、不登校だったんです」とその学生は話し始めた。どうやら大学で1年間登校できずに、いま5回生をやっているということのようだった。話したいんだなと思った。そこで少し話して別れたのだが、研究室に来たらいいよと言えばよかったとあとから思った。でもまあいいかと思直した。

同日 / 心理学基礎実験B：ウェクスラー式知能診断検査の実習ということで、大人版の検査(WAIS)を用いた。検査器具が5台で学生が20人強だから、4、5人に1台だ。各グループで各下位課題ごとに検査者と被検者を回し

ていって、そこで得られたデータを仮に1名のデータとみなして集計し知能指数を算出することにした。これにはグループの知能を出すという比喩が使えるかもしれない。そのように進めていたのだが、時間が足りなくなってきた。結局は、集計と知能指数の算出の体験のために、私が勝手に作ったデータについて評価してもらうことになった。検査者と被検者の体験、数的処理の体験を、なかなかみんな和やかに楽しそうにやっていた。レポートにどんな感想が書かれているか楽しみだ。

同日 / **f市教委に電話**：Lさんの修士論文の関係で、適応指導教室(教育委員会が設置している不登校児のためのクラス)にたくさんの不登校児が通っていると聞いているf市教委に電話をしてみた。しかし、「登校を始めている子については刺激をしたくないので、もしアンケートを実施できるとしても3名ぐらいになります」という答えだった。検討してまた連絡する旨を伝えた。

6.19. 月 / **大学院臨床心理査定演習Ⅰ**：前回で新版K式発達検査2001を終了して、今回からロールシャッハ・テストだ。院の2回生に検査者を引き受けてもらい、1回生全員のデータをとった。検査者が1名足りない分は私が担当して、本当に久しぶりに検査をした。3年半もやっていないのに教示がすらすらと出てきた。染み込んでるんだなあと思った。

同日 / **演習Ⅲ A・発達臨床実習**：授業の最初に、先週読んだ英文の3分の1ぐらいについて、一文ずつ私の訳文をつけたものを配った。それは前の日に作ったのだが、3分の1までしかできなかった。むずかしかった。みんなで英文を読む前には一応読んでいたのだが、いざきちんと訳文を作るとなると意味がとれない部分があちこちに出てくる。自分がわからないからといってこう言うのはナニだが、結構難解な文ではないかと思ったのだ。それをいきなり学生に与えてしまって申し訳ないし、そのことで英文離れしてほしくないし、自分たちが目にした英文はこういう意味なんだとよくわかる方が少しは馴染めるしと、いろいろ思った結果の行為だった。それに全文を訳してくれたKくんへのフィードバックのつもりもあった。残

りの3分の2についてもやらなければならない。今回以降は前回配布した新聞記事を刺激にして、「現代の子どもたちの心理」についてグループごとに発展研究を実施してもらうことにした。まずはグループごとの研究の企画だ。具体的なテーマについては、第1グループは「ブログ(ウェブログの略で、インターネット上での日記型の個人サイト)と子どもたち」、第2グループは「化粧と子どもたち」、第3グループは「友だち関係と子どもたち」になった。話し合いは結構活発に進み、調べるために図書館に移動するグループもあった。やっとゼミらしくなったかなと、ちょっとというよりだいぶ嬉しくなった。でも、この間アンケートをとっていたゼミコンパの話が出ないので、もしかして「実施しない」希望が多かったのではないかと、ちょっと心配になった。発達臨床実習の半分までをこの企画会議にあて、あとの時間は、次週に模擬家族で描いてもらう合同動的家族描画(後出)のために、台本のある家族の話し合いをロールプレイで体験してもらった。授業が終わってから女子学生の1人が、「発達臨床心理学を受講している友だちがテストが不安で、落ちる(単位が取れない)かもしれないから、もう授業にも出ずに落としてしまおうかなと言ってる」と教えてくれた。私はびっくりした。テストでは細かい記憶を問うことはしない、あなたの考えを聞かせてくれたらいいというようなアナウンスをしたことは覚えていて、でもそれは学生たちを安心させるために言ったのだが、逆に不安の種になったのかと思った。細かい記憶を問うてもらった方がラクで、あなたはどうですかなんてオープンな質問をしてもらっても自分としては困るというようなことなのだろうか。私に教えてくれた学生には、その人に不安に思わなくていいよと伝えておいてとお願いしたが、そう言われても何も書けなかったと私が責任を追求されても困るし、結局、試験に関しては事前に何も言うてはいけないということかななんて思ってしまった。

同日 /大学院1回生の秋学期の外部実習先：c精神病院に1名の実習受け入れを打診してみたのだが、受ける余裕がないという理由で断られた。来年度の余地はあるかもしれないからまた打診してほしいということだったの

で、そうしようと思う。これでc精神病院の可能性は消えたので、院1回生の実習先は、情緒障害児短期治療施設2か所に1名と2名、教育センター2名に確定した。当初、私は院生の希望によって人選しようとしていたが、K先生にうかがうと、将来の就職希望先に内容がより近いところを2回生で選ぶので、1回生の今年はそのことは異なるところで実習させるというように教員側で計画がなされているということだった。当然のことながらその方針に従うことになった。院生にはゴメンと謝ったのだが、みんな快く承諾してくれた。

6.22. 木／発達臨床心理学：他の授業も休みがちのMくんが顔を見せた。そして自分から私のところにやってきて、「この前、声をかけてもらったのに休んでしまってすみませんでした」と言う。私は思わず、謝らなくていいよと言いつつ、元気？と尋ねた。「この前まではちょっとあれだったんですけど、先週の授業は完全な寝坊でして……」ということだった。ホッとして嬉しくなった。授業のなかで、試験のことを不安に思っている人がいると聞いたけど……と前置きして、試験のことは不安に思わなくていいと伝えた。授業が終わってから学生がやってきて「どんな問題を出すんですか」と聞くので、まだ考えてないし考えていても言えないけど不安に思う必要はないよと告げると、笑顔を見せてくれた。笑顔を見せてくれたのは私として少しはよかったのだが、単位がとれるかどうか不安なのは一般論としてはわかるけど、そこまで具体的に不安になるというのは授業にあまり出席していない学生なのかな、そうじゃないとするとどうということなんだろうと思った。

同日 / 学校臨床心理学：発達障害についての授業を、図や絵本をスクリーンに映しながら行なった。この授業でも、試験に関して発達臨床心理学で言ったのと同じようなことを言っていたから、念のため、不安に思わなくていいよと伝えた。授業が終わると、1人の女子学生が、先ほどのパワーポイントの図を写しきれなかったので見せてもらえますかと、やってきた。発達障害のことに興味ある？と尋ねると、「私の弟がこういうふうなんです。

だから心理に入りました」と答えてくれた。私は研究室に戻り、発達臨床心理学の授業で用いた別のわかりやすい資料をとってきて、その学生に渡した。学生は、「ありがとうございます」と言って喜んでくれた。出席票の裏に時々何か書いてくれている学生がいる。私に向けた生の声なので、少しドキドキしながら楽しんでいる。今日はこんなことが書いてあった。

「私は小学生のとき忘れ物が多かったし、黒板に注目しなければならないときにボーッとしたりすることがあった。この授業以外の授業でも学習障害のことを聞いたが、その先生は『誰しも学習障害の傾向がある』と言われた。授業中に他のことを考えることが昔もよくあったし、今もある。私はAD／HD なのでしょうかね?」。次の授業で、「それだけ授業をよく聴いて自分について心配ができるのなら、大丈夫なんじゃないかなあ。でももし困ることがあったら声をかけてね」と答えよう。

同日 / 授業評価アンケートの結果とそれへのコメント：授業評価のアンケートでは、発達臨床心理学は全教員平均とまあ同じぐらい、学校臨床心理学については全教員平均を下回るという評価が出ている。ため息が出た。これにコメントを書けといわれても、どう書けばいいのだろうか。反省文みたいに私が悪うございましたと書くのも、そう書くこと自体が目的である行為はこの場合あまりにも意味がないと思う。かといって開き直ったり、学生の方が悪いと外罰的になっているのでもない。この評価に含まれている意味には興味はあるのだが、その意味を構成する諸要因については複雑すぎて特定できない。そんなことで、推論してもわかりにくいものを何々だと確定し、それに対して改善策を書かなければならないような状況自体について、無理なものを求められていると思われてしょうがない。それで、私は次のようなコメントを2科目ともに書いた。「今後もよりよき授業を工夫することは言うまでもないことですが、今回のアンケート結果に対するコメントについては、とくに書くべきことがみつかりません。あしからずご了承ください」。

授業評価アンケートの自由記述

●発達臨床心理学

- 話を聴くだけよりも、もう少し板書をしてほしいです。
- 児童養護施設に入っていたことがあるので、この授業はたいへん興味があります。でも、先生の授業は話を聴いているだけで眠いので、ちょっと黒板でも使ってくれたらいいと思います。

●学校臨床心理学

- 私は児童相談所で働きたいと思っていたので、この授業は事例などがいろいろあってすごく面白かった。もう少し資料があればよかったと思った。
- 小五のときに学級崩壊、高校のときに妹の不登校を経験したので、先生の実経験はとても興味深いです。
- 先生の話のみの講義になると自分も含めて寝てしまう人が出てくるので、紙に書く(黒板やプリントなどで)講義をしてもらいたいと思いました。この講義は僕の今後にとっても役立つと感じられることばかりでした。
- 私語がやかましいので声が聞き取れません。少しマイクの音量を上げていただきたいです。
- ノートにまとめにくい。
- 事例をあげて説明するやり方も具体的でいいと思う。
- みんな理解していないのに、何をしに先生が来ているのかわからない。他の授業を参考にした方がよいと思う。
- 授業に出る意味がない。センスなし。自己中心的な授業。
- まあ初めての講義だったこともあるから、仕方ないと思った。
- 現在の事件や自分の子育てを思い出しながら聴講しております。里親に関心があるのですが。

6.26.月／大学院臨床心理査定演習Ⅰ：ロールシャッハテストの2回目。秋学

期のK先生による査定演習Ⅱに向けた準備として、スコアリング(前出)まではやっておかなくてはならない。ロールシャッハテストにどんなイメージをもってもらえれば結構面倒なスコアリング作業を少しでも面倒がらずにやってもらえるかを考えて、提示されるプロット(刺激カードの図柄)が「○○に見える」ということがどんなふうに成立するか、プロットを「○○に見る」ということと自分の生活を生きることとの関係などについて、例を引きながらまずは話した。10年以上前、児童相談所で、ロールシャッハテストのことをほとんど知らないソーシャルワーカーの人たちに向けて、ロールシャッハテストとは何を見ようとするのかをわかってもらうために話したことがあったが、そのときの資料をもとにした。私の自己満足に終わったかもしれないが、ロールシャッハテストってそうなのかと思ってくれたとしたら幸いだ。

同日 / 演習Ⅲ A・発達臨床実習:「現代の子どもたちの心理」についてのグループ別発展研究の作業日だ。みんな活発に話し合っていて楽しそう。こんなのは初めてだ。もっと早い時期にこんな試みをやっとならばよかったと後悔した。しばらく休んでいた学生も顔を見せた。ゼミコンパの2回目のアンケート用紙も配られた。Fさんがインターンシップの選考に合格して、ホテルに実習に行くことが決まったと教えてくれた。私が推薦文を書いたものだから、お礼を言いに来てくれたのだ。まずはワンステップ、よかったね。発達臨床実習では、先週作ったロールプレイング家族を再現してもらい、その家族ごとに合同動的家族描画(CKFD)を描いてもらった。「家族で自由に話し合ってもらって結構ですから、家族で何かしているところの絵を描いてください」とお願いして、家族合同の描画行動のなかにその家族の交流の特徴を見いだそうとするものだ。それぞれの役になったつもりで学生から感想が聞けたり、こんな家族の感じだったという仮説が飛び出したりした。描かれた四つ切大の3枚の画用紙は私の研究室に保存しておくことにした。

同日 / Nくん来室:私の授業を受けているNくんが研究室に来た。臨床

心理士になりたくてこの大学に入ったんだけど、英語が苦手だから大学院に受かりっこないしと、就職に向けての準備のことが気になっている。高校の頃からずっと他の科目に比べて英語はできなかったという。べつに英語の専門家になろうとするのじゃないから、ちょっとずつ勉強していけばどうにかなるんじゃないかと私は話すのだが、自分は駄目なんだと決めている。でも大学院進学の思いも捨て切れていないようだ。進路については本人がしたいようにすればいいのだが、自分についての誤解かどうかはわからないが、あいまいなことが根拠になっていると口をはさみたくなる。どちらの方向かを強制されるのではなく、進路のことを考える機会にしてくれればいいと思って、また話しに来たらいいよと告げるとうなずいて帰った。

6.27. 火 / Lさんと教育委員会訪問 : Lさんの修士論文研究の協力者を得たくて、適応指導教室やフリースクールをあたっているのだが、調査をするということや質問項目が中学生に与える影響などの要因によって、簡単には引き受けてくれるところが見つからない。あるフリースクールとe市の適応指導教室は引き受けてくれることになったので、今日はその関係で適応指導教室を所管するe市教育委員会に、Lさんと一緒に2度目の打ち合わせに行った。様々な面への配慮が必要なことを話し合っているが、Lさんにとってはいい経験になっていると思う。こういう類のことはやはり日頃のつきあいや連携がものをいう。Lさんの研究の協力者数はまだまだ足りない。

同日 / Nくん再び来室 : Nくんが再び来室した。昨日は30分ぐらいで帰って行ったのだが、今日は1時間30分間、話し込んだ。進路のことが中心だったが、大学院か会社就職かだけではなく児童福祉関係の援助職の話も出した。広い幅で考えるのはいいことだと思った。

6.30. 金 / d学園訪問 : 大学院1回生のOさんと、d学園に見学に行きたいと申し出たH、I、Jさんの計4名を連れて、自動車で大学から1時間少しかかるd学園に行った。Oさんは秋から始まるd学園での実習のあい

さつが目的だ。園長さんは私が以前から存じ上げている方で、丁寧によくさんのお話をしてくださり、園内案内役の心理職の方も優しく教えてくださった。現場を見、現場の人に接するというのは、臨床心理学を知っても具体的なことのわからない学生にとってはきっと有益なことだと思う。学生たちの感想文をそえてお礼状を後日に送らせていただこう。少し道を間違えてのドライブ、静かで綺麗なd学園でのひととき、ペチャクチャ喋りながらのドライブインでの昼食、いい日だった。

4. 春学期のラスト・スパート

7.03. 月／大学院臨床心理査定演習Ⅰ：教科書に載っているロールシャッハ・テストのデータのスコアリングとその根拠の記述などを目で追いながら、私のコメントを含めて、みんなで確認していった。全10カードのうち第3カードまでしか進まなかったが、こういうのも結構充実していい時間だ。

同日 / **院生Pさんの発達検査研修**：大学院2回生のPさんが、秋に新版K式発達検査2001を用いたアルバイトに従事することになり、そのための検査の特訓を私にかわって私の知人が引き受けてくれることになった。その人やアルバイト先とのやりとりをPさんをお願いした。こんなふうにより外部とのつながりを作っていくのも大切なことだ。Oさんがd学園の感想文を提出してくれた。

同日 / **演習ⅢA・発達臨床実習**：グループ別発展研究のプレゼンテーションの日だ。それぞれのグループがちゃんと配布資料を作成し、発表をグループの中から2人が請け負ったり、あるいは全員が少しずつ分担したりして、成果を発表してくれた。学生相互の質問は少しだけだったが、私からの質問やコメント、注文も加えて、さらに充実したグループごとのレポートを完成させ後日提出するようにした。発達臨床実習の最初の時間を使い、みんなに4回生Bさんの卒業論文のための研究の協力者になってもらった。

そのあと、自分のジェノグラム(多世代家族関係図)を書いてもらった。書き方を説明し書くことになったが、親戚の兄弟数や名前を知らないなど、直面すると知らないことが明らかになるという実感が交わされ、面白い光景だった。わからなくてわかりたいことは次回までに親に電話したりして完成させてくるよう指示した。ゼミコンパは、みんなの都合や試験のスケジュールなどの関係で春学期には実施できず、秋学期に延期することが決まった。中心になって調整してくれている学生は、他の学生とのやりとりのなかで、自分の労力に比べてみんなの協力が十分でない側面にきっと不満を思ったりしただろうが、気丈に穏やかに振る舞ってくれていた。ホントにごくろうさんやねというと、少しだけ微笑んでくれた。

同日 / Qくんが来室：発達臨床心理学の授業で、児童相談所の職員になるにはどうしたらいいか聞かせてほしいと前の週の出席票の裏に書いてあったので、そのリクエストに答えたのだが、もっと詳しく教えてほしいとそのリクエストした本人、Qくんが研究室にやってきた。子どもに関する対人援助職に就きたいらしく、保育士の資格をとることも視野に入れているような頑張り屋だ。教員の研究室に来るのは初めてのようで随分緊張していた。児童福祉施設などにボランティアで行ってみることを提案し、私はそのときの口利き役を申し出た。ちょっとでもイメージがクリアになっただろうか。

同日 / Rさん来室：4回生のRさんが卒業論文のことで初めて研究室を尋ねてきた。親子間の葛藤を扱うのに心理テストの投影法(被検者のより深いところの心理が投影されると仮説されている人格検査。一般に解釈などがむずかしい)を用いたいが、質問紙法(実施や結果の整理、解釈が比較的易しい)にしておいた方がいいだろうかというような内容だった。Rさんは大学院進学の希望を持っていたので、私は、その研究テーマが引き続くのなら投影法は修士論文に向けてとっておいて、今回は質問紙法にすることを勧めた。そして質問紙については、Aさんが同じく卒業論文のための研究で使っている親子関係テストを参考にしてみたらいいというと、そうしてみます

とのことだった。

7.04. 火／情緒障害児短期治療施設 g 学園と児童養護施設 h 学園を訪問：大学院 1 回生の S くん T くんのリクエストで、まずは私 1 人で g 学園に行ってきた。院長、副院長、実習担当の治療係長のお三方にご挨拶し、打ち合わせを行なった。その帰路、h 学園に立ち寄り、知り合いの主任指導員や園長先生との間で実習や就職に関する所用を済ませた。

7.06. 木／発達臨床心理学：先週の積み残しの非行の事例の紹介と解説を済ませたあと、受講生全員に 4 回生 A さんの卒業論文用研究の協力者になってもらった。そのあと、児童福祉施設などへの就職を漠然とでも思っている人があれば、そこがどんなところかを知るために見学に行ったりボランティアをすることなどは意味があるので、私に相談してくれたらいいとアナウンスした。d 学園に行った 3 回生の 3 人が感想文を提出してくれた。

同日 / 学校臨床心理学：先週の出席票の裏に書いてあったリクエストに応じて、広汎性発達障害^(注)について絵本を使って話した。それに加えて、当初から予定していた大人のパーソナリティ障害^(注)についても紹介した。来週は最終回なので、以前からリクエストを受けている「里親制度^(注)」に関する事、そのほかのリクエストされたことについてお話するから、今日も出席票の裏に希望のある人は書いてくださいと伝えた。すると、何枚かに書いてあった。DV(前出)、うつ、のび太・ジャイアン症候群^(注)、自閉症者の才能……その他。リクエストがあると嬉しい。ちゃんと聴いてちゃんと要望を寄せる人がいることが確認できた。

(注) 広汎性発達障害：自閉症スペクトラムの自閉性障害、アスペルガー症候群(アスペルガーはこの症候群を見出した医師の名前で、自閉症の一類型。次の高機能自閉症と区別しない学者もいる)や高機能自閉症(高機能とは知能が低くないという意味)、その他を含む。

パーソナリティ障害：その人の属する文化から期待されるものより著しく偏った内的体験及び行動の持続的様式で、妄想性、反社会性、境界性、演技性、自己愛性、回避性の各人格障害に分類される。

のび太・ジャイアン症候群：いじめやいじめられの背景に、AD / HD

や広汎性発達障害があるという仮説を示したもの。

同日 / **心理学基礎実験 B** : 今週は私がメインに担当する番で、内田クレペリン精神作業検査(加算作業によるパーソナリティ検査)の実習を行なった。私はこの検査が好きではない。以前、受けたときにイライラしてしんどかったからだ。だから、そのときに自分はこの検査は行なわないと決め、実際、これまで実施したことはなかった。学生に実習させたあと、私のこの思いを言ってしまった。言ったことがよかったかどうかはわからないが、いやあ、みなさんご苦労さんという感じだった。そのあとの結果の整理と読みについて、細かい類型化作業は省略した。煩雑だからだ。もともと個別性がありすぎて判断のむずかしい結果を類型に押し込む作業というのは、気持ちのいいものではない。でも、その結果、おおまかな結果の整理と読みとを結びつけてさせようとしたものだから、学生の方も明確な指針が得られず困惑したようだ。もともとあいまいなことを自分なりのセンスで整理する力がまだ育てられていない学生だから、明確でないことは苦手だ。質問の手が挙がり、その手をめがけて走り回る頻度はこれまでで最高だった。来年からはともかく、秋学期には別の学生グループにこのクレペリン検査を実習させなければならないので、私の中での整理が必要だ。

7.10. 月 / 演習Ⅲ A・発達臨床実習 : Aさんの卒論のためのデータ収集にもゼミ生が協力してくれた。今日は前回の発展研究発表のグループごとのレポート完成作業日。それぞれのグループで作業を行なった。発達臨床実習では前回書いてもらったジェノグラムを使用した。家で親に尋ねたり親に電話したりして内容を補充した学生もいたようだ。本当は2人1組で互いに自分のジェノグラムを相手に公開し、家族や親族間の関係性などについて相手から質問してもらい答えるという設定にしたかったのだが、自分のジェノグラム、つまりプライバシーの公開について気になった。それで、各人の気持ちを確認することにした。公開が嫌な人は手を挙げてくださいうという設定は好ましくないので、各人に白紙の紙切れを配り、「相手に公

開してかまわない人と、少し気になるけど勉強のためだったらかまわない人は“YES”，公開が嫌な人は“NO”を記入してください。1人でも“NO”の人がいたら公開はせずに自分1人の中での作業とします」と伝えた。結果は“NO”が1名おり、約束どおり自分1人で自分のジェノグラムについて、家族や親族間の関係性を検討させることにした。心理の学生にはプライバシー保護の感覚を学ばせ、また別の次元では自分のプライバシーに関して一般的な保護感覚を超えてきちんと避けずに扱うことの両方を体験させたいのだが、心理臨床のプロになろうとする大学院生ならいざ知らず、専門であってまだ専門でないような学部生に対しては、今日のようなやり方ではないかと思った。

演習Ⅲ A と発達臨床実習の春学期の実際

- ①演習：各自の自己紹介。児童相談所の紹介。
実習：新版 K 式発達検査2001の紹介。
- ②演習：2人1組での自己紹介や傾聴実習。
実習：ブラインド・ウォーク。
- ③演習・実習：グループ討議による事例研究。
- ④演習：授業計画案や見学実習先についての話し合い。
実習：マイクロ・カウンセリング(様々な学派を超えて重要とされているカウンセリングの基礎技法の学習)実習。
- ⑤演習：キャリアサポート・センター(就職部)による就職希望者への講義。
実習：「面接」に関する論文読解。
- ⑥演習・実習：応答構成法。
- ⑦演習：発達臨床に関する統計データなどを見て考える。
実習：新版 K 式発達検査のデモンストレーションと観察。
- ⑧演習：NHK ドラマ「ながらえ」の視聴。
実習：新版 K 式発達検査2001状況の VTR 視聴と意見交換。

⑨演習：虐待・DVに関する英文読解。

実習：演習の続きと、「現代の子ども像」に関する新聞連載記事の検討。

⑩演習：「現代の子ども像」に関するグループ別発展研究企画。

実習：演習の続きと、虐待や非行児童の家族のロールプレイ。

⑪演習：「現代の子ども像」に関するグループ別発展研究作業。

実習：ロールプレイ家族による合同動的家族描画実習。

⑫演習：「現代の子ども像」に関するグループ別発展研究プレゼンテーション。

実習：各自のジェノグラム作成。

⑬演習：「現代の子ども像」に関するグループ別発展研究レポート完成作業。

実習：各自のジェノグラムの検討。

同日 / U君来室：学校臨床心理学の授業をいつも一番前の席で聴いてくれている、2回生のUくんが来室した。試験の持ち込み許可(試験時に持ち込み、回答の際に参照してよい資料に関すること)に関する質問が彼の口からまず出たが、椅子を勧めると座り、臨床心理士になりたくて大学院に行きたいのだけど……という話だった。同じく臨床心理士になりたい友だちが他の大学の大学院に行くというのだけれど、自分はそんなことをする理由がもうひとつわからないと言う。私はここの大学院はよそに比べてひけはとらないし、僕らは一所懸命教えるし、要はその人の問題だから、ここの大学院に進んだらいいと伝えた。彼が「そうですよねえ」と言うので、そうですよと答えた。

7.12. 水 / VさんとWさんが来室：Vさんは私の授業に出ている学生だ。Wさんは直接は私が担当している学生ではない。2人とも2回生だが、WさんはVさんについてきたという感じだ。用は他愛もないことだったが、もしかして一ぺん研究室とやらに行ってみようというのが主眼だったかも

しれない。2人とも可愛らしい落ち着いたのさでキョロキョロしていた。こちらも他愛ない話をして、午後のお茶の時間が終わった。

7.13. 木／発達臨床心理学：最後の授業で、児童福祉施設で生活している子どものことを話した。授業評価アンケートに、「自分は児童福祉施設で生活していた。だから先生の話にはとても興味がある」と書いてくれていた女子学生がいた。たしかに、私は児童福祉施設のことは折りにふれて話した。そして一度は時間を多くとって話そうと思っていたのだ。施設で生活していた17歳の女の子の非行をきっかけに関わった全容について話した。また、これまでも事例をもとにした話をたくさんしたのだが(もちろん、プライベートを配慮し工夫して話している)、具体的な私と子どもとのやりとりについては簡単にしか紹介していなかった。そこで、男子高校生に対して4回にわたって児童相談所で行なった面接記録があったので、それをもとにして話した。臨場感とともに学生の耳に届いていたらいいなと思った。

発達臨床心理学の春学期の実際

- ①発達臨床心理学の前提。児童相談所業務の実際(その1)。
- ②児童相談所業務の実際(その2)。
- ③円環論^(注)によるシステムズアプローチ(システム論的方法)の紹介。
- ④アセスメント(査定)、トリートメント(処遇)、コミュニティ・アプローチ。
- ⑤低年齢児の発達臨床。
- ⑥児童虐待詳論(その1)。
- ⑦児童虐待詳論(その2)。授業評価アンケート実施。
- ⑧児童虐待詳論(その3)。
- ⑨発達障害(DSM-IV^(注)と総論)。
- ⑩発達障害(自閉症)。
- ⑪不登校。
- ⑫非行。

⑬ 児童福祉施設で暮らす子どもたち。

(注) 円環論：原因と結果が直線で結ばれる直線的因果論に対して、ものごとは円環のように連鎖しており、すべてのことが原因であり結果であるので、単純な因果論は成立しないとする論。

DSM-Ⅳ：アメリカ精神医学会による「精神疾患の分類と診断の手引き第4版」

同日 / 学校臨床心理学：前回の出席票の裏に書いてあった“リクエスト”にもとづいて授業を構成した。最後に、「きっと教室がシーンとするぞ」と前置きし、試験について話した。「私の予想どおりになるのがくやしかったら、ざわついたらいいよ」とも言ってみたが、しばらくはシーンとしてみんな聞いていた。だんだんざわついてきたが。春学期で一番エネルギーを使ったのはこの科目だった。とはいっても科目の内容が問題だったわけではなく、前にも述べたが、受講生の100人前後の数と教室の縦長の形態がその要因だった。奥行きのある大教室のとくに真ん中から後ろの席では、私の存在とは無関係な動きが起りやすくなるのだ。それに比べて発達臨床心理学の階段教室は大きい部屋ではあっても後ろの席が私の上に見え、前の席と後ろの席と私とで三角形が描けるような空間は、1つのまとまりをもった落ち着いたものだった。

学校臨床心理学の春学期の実際

- ①「学校」のイメージ。学校臨床心理学とは。児童相談所の紹介。
- ②円環論(前出)によるシステムズ・アプローチの紹介。
- ③学校における様々な要因の総論。再度、システムとして見る目について。
- ④「学級崩壊」。学校がもつ構造とリアリティ。絵本「はせがわくんきらいや」。
- ⑤学校現場にかかわる社会的事象に関する新聞記事の提示と解説。

- ⑥児童相談所におけるグループ療育事業の実際。
- ⑦不登校(その1)。
- ⑧不登校(その2)。
- ⑨非行。
- ⑩発達障害。
- ⑪いじめ。虐待。
- ⑫広汎性発達障害。人格障害。
- ⑬里親制度。DV。うつ。のび太ジャイアン症候群。自閉症に関して……など。

同日 / **心理学基礎実験B**：描画法(描画による人格検査。投影法に分類される)として、バウムテスト(木を描かせる検査法)の実験実習を行なった。木を描いているときにどんなことを思ったか、教示の違いなどによって何がどう違ったかを各自レポートするというものだ。先回の内田クレペリン精神作業検査やほかの検査の実習でもそうなのだが、学部生、それも2回生の限られた時間での実習で、結果の解釈までもっていくことには抵抗がある。解釈なんて機械的にできるものではないし、それ相応の人的発達や力量が要る。また結果として出た内容によって学生が一面的に自分のことを決めつけ、影響を受けるのは好ましくない。でも一定のことは教えなければならぬ。この描画法では解釈についてとくに気をつけなければならない。できれば解釈は避けて通りたい……。そこで、体験実習、体験報告ということにとどめようとしたのだが、やはり木を描いた学生自身にとってはそれだけでは不足だ。内容的にバランスのよい解釈についての論文があったのでコピーして配り、その内容にそって自分の描いた木のことを考えてみたらいいと告げた。でも、それだけでは済まないかなという雰囲気を私はまた投影気味に感じて、自分の木についてコメントのほしい人は私の研究室に来なさいと伝えた。たくさんの学生が、それこそ占いの順番を待つ行列のように並ぶ姿を一瞬思い浮かべたが、まあそんなこともないだろうと

思い直した。

心理学基礎実験 B の春学期の実際

- ①心理学実験の方法論。一対比較法。
- ②心理検査法 I (YG 性格検査)。
- ③観察法 I (実験的観察法)。
- ④観察法 II (フィールド・ワーク)。
- ⑤面接法 (臨床的面接法)。
- ⑥質問紙法 I。
- ⑦質問紙法 II。
- ⑧質問紙法 III。
- ⑨心理検査法 II (ウェクスラー式知能診断検査)。
- ⑩質問紙法 IV。
- ⑪質問紙法 V。
- ⑫心理検査法 III (内田クレペリン精神作業検査)。
- ⑬心理検査法 IV (描画法)。

同日 / A さん来室：A さんと B さんが卒業論文のことで来室した。A さんは自分のテーマと関連した新しい論文を見つけたとのことだ。2 人ともデータはとり終え、あとは結果の整理と考察だ。そしてこれも 2 人とも他大学の大学院入試を控えている。暑い夏だ。

同日 / X さんと駅のホームで会う：帰りの JR の駅のホームで、学校臨床心理学の授業を聴いてくれている 2 回生の X さんが声をかけてきてくれた。そして続けて電車のシートで向かい合って話してくれたことは、一緒に暮らしている高校生の妹さんのことだった。心配していることを少し話して、それじゃあと X さんは先に電車を降りて行った。

7.18. 火 / Y くん来室：私の授業を受けている 3 回生の Y くんが来室した。児童相談所の話を知りたいとのことだった。将来、非行の子に関わる仕事

をしたいと思っていて、警察官の試験も受けるつもりをしているようだ。非行福祉、児童福祉に関する仕事や職種の話もした。非行に関係する仕事につきたいと思ったのは身近な経験からのようだったが、自分の地平から社会に向けて何かを見つめているというのは、とてもわかりやすく、素直で、いっぱい応援したくなる。

同日 / Zさん入室：バウムテストの解釈を求めて初めて研究室を訪れたのがZさんだった。とってもいい木を描いていた。YG性格検査での結果が自分としてはあまりよくなくて意外だったので、自分のことについてとても気になったようだ。私が検査を作ったわけじゃないから私が悪いのではないのだけれど、ごめんねと思わず謝った。そして「いい木」を一緒にいろいろと喋りながら見つけた。

7.20. 木／はじめての試験監督：1時限目に発達臨床心理学，3時限目に学校臨床心理学の試験だった。前者の試験問題は「発達臨床心理学の授業の内容をふりかえり，子どもや家族への援助について考えたり，実際に進めていくうえで大切なことだと，あなたなりに思うことについて，できるだけ詳しく述べてください。もし，思うことがなければ，思うことがないということに関してできるだけ詳しくコメントしてください(この誠実なコメントによって，あなたが採点上で不利になることはありません)。途中退席せず60分をフルに使い，この問いへの回答に取り組んでください(試験開始後30分で退出可のルールがあるのでそのルールが優先されます。これは単なる要望です)」。後者の試験問題は「学校臨床心理学の授業をふりかえって，もし，あなたが教師，あるいはスクールカウンセラーになるとしたら，こういうことはこういう意味があるからこんなふうに大切にしようと思うことについて，できるだけ詳しく述べてください(以下は発達臨床心理学の問題と同様)」。似たようなもんだ。みんな一所懸命にたくさん書いてくれていた。回答を読むのは大変だろうが，どんなことが書かれているか楽しみだ。いずれにしろ，全13回の講義とこの試験までみんなおつき合いしてくれた。答案用紙を受け取るときに，みんなに自然に「ご苦勞様でした」という言

葉が口をついた。多くの学生がニッコリしてくれた。

発達臨床心理学の試験の回答から抜粋

- ……援助者の「してあげる」「してあげよう」という態度に嫌気がさしていたのである。見下されているように感じていた。他人に読まれてしまう、わかったように言われてしまう、諭されるのは嫌だったのだ。でも、その援助者の立場や気持ちも今ならわかりはする。援助とはナイーブなものである。……
- ……大学に入る前、テレビを観て「カウンセラーになりたい」と思った。その頃は「助けられる」と思っていた。しかし、実際は支える存在、援助する存在であり、中心はクライアントなんだと感じた。……
- ……人は自分の意思や気持ちを口に出して言える唯一の生き物である。それだからこそその人に対する援助はむずかしく、何に焦点を当てて対応するのかがデリケートな問題である。そこで、相手が何を思い何を感じたのかを知り、それを援助の手がかりとすることになる。そうでなければ、勝手に一方的に援助したつもりで相手を傷つけている場合もあるだろう。そこにある問題が非行であれ、障害や病気にまつわることであれ、何であれ、相手が本当のところ何を求めているかである。……
- ……僕が言いたいのは、援助においては「人間性」が大事だということだ。「いい人・わるい人」ということではなく、相手との相性がどれだけいいか、相手がどれだけ気を許すかということだ。相手が気を許していなければ、必死に伝えても伝わらないものは伝わらない。ここまで書いていて気がついたが、「私とは相性が合わないようだから、他の援助者と代わります」なんていうことができるかという、むずかしいのではないかと思う。最初の段階で援助の契約をしたのだから、頑張る義務がある。先ほど述べたことと変わってしまうが……どうすればいいのかはわからないが、とにかく相手に信用してもらえるよう

に努力することなのだろう。……

学校臨床心理学の試験の回答から抜粋

- ……子どもが30人いれば、父親と母親が単純計算で60人はいることになる。さらに兄弟姉妹は数え切れない。祖父母もいる。このそれぞれに性格などの特性があり、年齢などに応じた生きる環境があり、様々な思い、悩みを抱えているはずである。30人の子どもの1人1人の学校で見せる様子は、そういったいろいろなこと関数である。だから、「みんな同じ子どもなんだから、みんな同じようなもの」などと思っ
てはいけない。可能な限り、子どもがどんな環境で生きているかをわ
かったうえでコミュニケーションが必要である。こんな聖徳太子の
ようなことは自分にはとてもできそうにないので、教師になどなりた
くないというか、なっ
てはいけないと思うのだ。……
- ……何かの問題が起きたとき、問題の生徒が現れたとき、それを恐れ
ないことだ。意味のあるなしはそのときはわからないし、無理に意味
づけすることはないが、まさにそのときに起こったそのことは、もう
二度とないということだ。私はそのときに居あわせたならば、必死に
考えると思う。私は、人は他人の苦しみを本当には理解できないと思
う。人は自分を通してしか物事を感じられないと思うからだ。自分に
ないものは理解できない。非人間的な意見かもしれないけど、このこ
とについて深く考えずに誰かを援助したり見守る仕事をするのは、む
ずかしいと思う。思いやりや優しさというものも信じすぎると危険だ。
人は他人の苦しみを理解できない、何かをしてあげたいという気持ち
も自己満足にすぎないかもしれない。このことを本当に考え悩みなが
らも、それを越えていこうと決意することが大事なのだと思う。……

試験の答案に「何も思うことがない」と書かれたものはなかった。私は
試験を通して一所懸命に取り組む時間を提供したつもりだったが、「自分

の考えをまとめるいい機会を作ってもらってありがたかった」という感想に出会ったときには、やった!と思った。また抜粋したようによく考えられた内容も多く、発達臨床心理学の抜粋の最後の回答などは、考えながら書くうちに先ほどの論旨と矛盾してきて、困ってまた考えているという様子がそのまま表れているのが面白かったし、考えるっていいことだなと思った。

4か月間にあったエピソードをピックアップしてきた。それがただの点の集まりではなく線、そして面として読者に届いた部分があったとしたら嬉しい。私は書きたくて書いた。書いて伝えたかったことは書いたことのそれ以上でも以下でもないの、まとめはない。でも一言だけ……若者との人間関係の生(ライブ)状況に投げ込まれるのは、わるくない。

*個人の描写については、内容の本質を歪めない範囲で変更を加えました。

(了)